鈍亭魯文作

甲州道中膝栗毛　一光■芳盛画

甲州一丁目の
ふじ
甲州
道中
膝栗毛

身延　　魯文戯作

甲州道中膝栗毛

参詣　　芳盛狂画

下女「モシおじやう
さんしんゑもん丁の
いとせううらひざ
くりげのあとがでたと
まうしてただいまもつて
まいりましたヨ
むすめ『ヲヤヲヤ
ちよつとおみせ
ヨトひらいてみて
こんどはかうしう
だうちうだねへ
さくはやつぱりろぶん
だよそしてよしもりがかいた
ゑだからまことにいいねへ

わたいはすこしあんばいがわるい
ときはひざくりげを見るとぢつきによく
なるヨまことにおかしいね エ下 「そのつぎの△
むづかしいいぐさはいちまい
はねてよみ
はじめのところ
から〇
〇およみあそば
せナ
むすめ 「ナニサ
それでは
しゆゐが
わからない
からマア
ぢよぶん
をよむ
のを
きき
やよ

くりげかいだうちやつけ　ぜんぶいつさつ

膝栗毛街道茶漬　　全部一冊　　二拾五枚

かうじよ

口序

ごかんぶつさまがたますますごきげんよくいるきょうえつしごく

一看■諸君倍々御機嫌能入■られ恐悦至極に
そんしたてまつり■よくわたくしぎこのたひ
奉存候随て僕儀今般膝栗毛街道茶漬と申
いつへんよみきりげさくうちもうでひきつづきかうしう
一編讀切の戯作乃内成田詣大山詣に引續甲州
だうちうみのふさんけいまきまでへんしゆつもちろん
道中より身延参詣の巻迄編述仕候勿論全部の
こんたてりやくがてがるもつはこつけいあんはいねん
大意は畧画の手軽を専らと仕滑稽の塩梅に念を
いれこじんふうみかりしうくとうなるいじふうまくおほ
入古人一九乃風■を仮地口秀句の小書等成丈美味大
やすうりあいだうりいだごひやうはんよろしくわれ
安賣仕候間賣出し當日より御評判宜我も我も
おんもとめほどをやかためうだいふたやくはかまひき
と御求の程■主の名代二役ちろりの袴引かけて
ななえやえいくえごひいきおんとりたて
七重の■■■八重九重の幾重にも御贔屓御取立を
きりためすみまてこひねかひあげたてまつりそのためほうて

う

切留の角からすみ迄奉希上候其為包丁さより

安政四巳初春発

うりそめたうじつ■やうずり

賣初當日上摺差上申候

料理人　鈍亭魯文記

江戸
さい
菜もさぞ
てつほうたま
鉄砲玉の
させんまめ
■■豆
え
絵をもの
たう
なる滴■
ちやつけ
茶漬
門人
金亭
愚文
弥「コウきたはち（ゐ）まあさめしを
くちてきたばかりだがかいだう
ちやつけとはめつらしいいつぺい
やらかそふじやアねへか
北「ヤレ一ついくらなそしてこの
ちやつけはせんだつてどんてい
ろふんとかいふけさくしやにいき
ふだをかいたのをとくためけ■

さだめしいしぼとけのてんかく
にこつふどう
でまの
ぎせん
未めつ
おうやだらう
から
たに
くふと
はらを
くだすぜ○
○弥「そんならよして
サアサアしん
しゆくまて
いそごう
いそごう

かいだう
街道
ちやづけ
茶漬の
しんみせ
新店の
おもて

外表
がわ

しんじゆく　一里
新宿
廿五丁
弥「イヤおばア
さんこのあいだは
さつぱりこぶさたをいたし
やしたときにゑんまさんも
ちざりさんもごきげんようごぜへ
ますかイヤおばアさんもだんだん
としがよんなすつた（とみ）へて
さつはりみみかきこへな
さらねへ北「コレやじ
さんあんまりむだ
くちをきいてませつ
けへすと■しつけ
せうはかへいつたとき
にまつぱだかに
されるぜヤ「はかア
いへおれの○
○ようなこせりのいいものがなにさんづがわ○
○あたりで
はだかに
なる■いる
をはやア

てめへ
の
こと
だ
ヤア
い
■■

たかゐと　二里
高井戸

十丁

弥「コウコウ
小ぞうここら
にやすくて
うめへつやづけやがあるなら
をしへてくれにもんやる
から小「おぢさんおめへめしを
くふならせうやさんのとこへござらつ
しやるとぜにはいらねへでごちそう
があるぜ北「ハハアそりやアみみ
よりだそしてほうじでもある
のか小「ハアごせんその三ひやく
ねんきだアからだれにでも

さけさかなをだしてふるまふ
のだア弥「そいつはきめうきめうそして
そのせうやどのはどこだ小「とこだといつて
にもんばかりくれさつしやつちやアおしへ
まふさねへや「そん
なら十六文やらふ
小「いやだいやだ北「こう
そんならおもひきつて
五十やるからはやくをしへ
てくれろヨ小「サアくれ
さつせいと五十とつておぢさん○
○おれと
いつ
しよに
きさつせへ
といつさん
にかけいたし
てゆくゆへ
りやう
人▲
▲ながら
あとを
をひ
かけて

ゆく

と

とほく

にて

小「あかん

ベイ

いしはら　二里
石原
十丁
弥「コラコラきだはち
なんと大そういい
かきがなつている
しやアねへか
ぢきにとれるぜ
コウさいはひ
あたりにひとも
ねへからてめへ
ちよつとおれが
かたへのつて
ぼうきれで
ひつはたくと
五つや六つつるは
ぞうさもねへサアサア
はやくのんねへのんねへ
北「ヲットこうかそれ
しつかりしねへト弥二■■
かたへのつてぼうをもち
かきの木をひとつたたくと
五つ六つばらばらとおちる□
□ゆへあはてて（下）へおり

ようとするをかたくるま
にのせたやじらうは
きだはちがみつかつた
のかとおもひそこへ
きだはちをほうり
なげていつさんに
にけてゆくゆへ
きだはちは大地へ
なげつけられ
つらのつらのかわを
すりむきこし
をいためながら
びつこをひきひき
北「ヲヲイヲヲイやじさんやじさん
きでもちがつた
のかマアマアまち
ねへトとめても
とまらず
弥「エイサツエイサツエイサツ
といつせうけん
めいでにげて
ゆく

一里

府中

廿七丁

北「コウやじさん
おめへマアごぶし
■ん■
きで
も
ちが
ヤア
しねへか
おれをかたのうへから
かつほふりだして
いつせうけんめいに
ちうど一り廿七丁の
あいだにげとふしたぜ
弥「ハハハおらアてめへが
かたのうへてそそくさする
からこいつはてつきりみつかつ
たんてあらふとをもつたから
ひよつとたたきなぐられたら
（ぼうしばりゆで■）きれちやア
げへぶんがわりいからそれてにげ□
□だしたのヨ

そんならみつかつたの
じやアねへか北「なに
みつかるものか
あわをくふ
もてへげへ
にしな
せへ
まつ
かきを
一ツ
やら
う
そふと
たもと
からたして
みる所か
ゆすの
みゆへ
二人りは
ひつ
くり
「ヲヤヲヤヲヤ

三里

日野

八丁

や「きよねん
たかをさんへ
めへつたとき
にこのしゆくへとまつたべらぼう
にしやれのめしたせ北「たれが
おごりや「ナニたれかおこる
ものかてんでんにわりめへよ
北「へへエあんまりわりめへて
さわぐふりてもあるめへ
弥「とんだひとをみくひつた
ことをいうおとこだせ北「われ
でもおとこしおもての八さん
やなにかとゑのしまへ
いつたときにみちへでかせに
をおとしたといつてみちみち
のいりやうをみんなにはら
はしたあげくにやどへついて
ふんどしへくるんでおいた
さいふをおとしてあぶらを
とられたちやアねへか（や）「ア
ハハハそれはきうあくだから

かずにやア
いれねへ

一里

八王子

廿八丁

たひ人「■■
きさま■
ひと
のねとこへこそこそ
へゑつてくるのはおほ
かたまくらさかしの
こそのはいてあらふサア
だふいふわけであいさつも
なくおれがねとこへきたのだ
いいわけかなけりやそこを
いつすんもうごかさねへ北「ヘイヘイヘイ
イヤモウどふたてまつりまして
わたくしさねなんざアひとさまの
ものをはし一ぼんちりつはひとつ
なんするなぞと申けるそんな
おこころもちはすこしもたてまつり
ませんねぼけつかまつりまして

つうづにたてまつりませうとぞんし
たてまつりましてかようつかまつり
ましたわけでさようなうあんぜん
ばんなものではたてまつりませぬ
だふぞこかんべんのたんをねがひたて
まつりますヘイヘイヘイ「コウコウそんなに△
△たてまつり
ちらしに
してひと
を小はか
■■しに
つ■
つつちやア
なをかん
へんなら
ねへコレ
おたこややともてい
しつ■■ん
てこい
とんた
とん
ちき

こまきの　一里
駒木野　廿九丁

北「ヲイ
やじさん
そこらていつへいあおりかけちや
どふだらう弥「いまあと
のゐざけやていつへい
やらふとおもつたかうち
のがきがどろだらけな
てでみせのすなばちの
いものにころばしを
つかんでくらふのを
みたらむねがわるく
なつた北「とかくここら
い■そまつたアレアレ
あすこにうとんやが
あるからぞろぞろと
一ぱいつつやらかそふ
や「ヲヤあのうとんやの
かかじやをみねへ
つゆをもりながら
みつつほなをならし
こむぜ

ケツフケツフ
「サアサア
ここらでやすむ
べい

小佛宿
北「モシあねさんなん
どきだへ「ハイ○
○ただ
いま
■つで
ござります北「そいつははやかつた
ときになんぞあるなら二つばかり
（か）けてくだつし「ハイあいの
にびたしにあいのはやつけが
こさります北「そいつはあい
つくしでこんやのしやれだそれを
二人めへばかりはやくだして
くだせへ「ハイハイトしたくにかかる
北「弥二さんはとふしたらう
たうけのしたてぜついんへはいつ
たがねつみにてもしかれやア
しねへかトとうけのしたをみま

はすおりからやじらうは
せいせいいってむせきたりや「きた
はちそこかさんがおもくて
おそくなつた

をはら　一里
小原
九丁
北「コラおらつ
ちがちつと
やすむのだ○
○からそこを
どいてくだつし
こしき「イヤここは
どかれましねへ
北「ヲヤヲヤとんだ
こじきだきちがひ
かしらんこしき「なんだ
とへおらよりかおまい
たちがきちがひだ
ぜんてへたひ人といふもの
はやすむにはいくらもちややか
あるからそこでやすむのか
ほんたうだつじとふてやすむ
のはこちとこがはたけだそして
ここはむらのしゆからそうじ
やくにたのまれている
とこだ
からモシ

（し）やだい
でも
おき
なす
つたら
ちつと
かして
しん
せ
やう
さも
なけ
りやア
とふらち
しやいとうふらつしやい
弥「アア
いめへまし
こじきに
まではか
にされ
た
よせ

与瀬

えのたび人

「いま

とうげから

いつしよにきたふたりは

なんたか（をさなやらく）だねへ

やたらにひとのかほばかりみてきよろきよろ

してついてきやアかつたヨ■「アア

そふサああいふやつかこまのはいこ

（やらたちう）ひとつしやう

だんでもしやアかつたらめの

たまへかんさしをつつこんで

やらふせヲヤヲヤうわさを

すればかけとやらでそれ

あとからまたきたよ

吉野　一里

弥「こいつはこいつはこいとりころんで
くさいそくさいそエエいめへましひ
ひとのかつぱえ
はねかしやアかつてはな
もちがならねへうぬ
きをつけやアがれ
くそつたれやらう
め北「コウコウ弥二さん
そんなりくつ
をいふとこ
ろしやア
ねへアレアレあしもとへ
こいがながれくるせわらしなけへ
でもはね■とくさくつてやどへ
ついてからだれもあらつてくれ
てがねへや「エエくそをかつい
でころぶやつがどこのくにに
あるものか（こいため）「とこの
くにになくつてもここのとち
にあるわへや「うぬた（たき）
なくるそこい「だたきなくる
もすさましいくそても
くらやアかれ

せきの
関野　　廿六町
まこ「ヤイなぜ
おらがうまのくち
をとりやアがつた
きかねへぞきかねへぞ弥「なんだこのはつかけ
やらうめなぜそんなら三びきも五ひき
もくちつきのねへうめをひとりで
あとからぶらぶらとついてきやアがつた
おうらいのじやまになるからくちを
とつてわきへのけたのだそれが
どふしたのだべらぼうめま「こいつ
こいつふてへことをぬかしやアがる
さんびきうまのくちなしはこの
くにのおてんまをつとめるごめん
だはへサアやくしよまでひき
ずつてゆくからうごきやアがる
なトいきなりやじらうが
むなぐらをむずとつかめる
ゆへやじらうもこのくにの
ごめんときいておほきに
てこずりしよげりかへつ

てうろうろとするにぞ
きたはちもさいぜんから
みてゐたりしか弥二（み）が□
□はじ
めの
いき
ほひ
に
ひき
かへこまつた
やうすをみてたち
かかり
ま
ご
に△
△わびこと
してすませ
ける

うへはら
上の原　三四丁
弥「えどをおととい
たつことときうみが
三日めだからたんと
はへはしめへに北「ヲイやじさんおめへ
のさかやきがそんなにどふしてはへる
ものかモウあたまがおほやかんだ
弥「コウきだはちそれでもきさま
のこんにやくあたまにはましだ
らう北「やかんもいいがおめへ
のようなそこここにてくま
ひくまのあるやかんはモウ
つぶしよりしかたが
ねへ弥「べらぼうめおとこ
はすこしあたまがはげ
かからねへけりやアねうち
がねへくやしきやア
はげてみな北「たれが
すきこのんではげ
させるやつがあるものか
弥「エエまだ
てめへは
あをい

ナア

つる川　十八丁
弥「ヤイきだ
はちこのころ
はこのきんしよを
くわうほうさまか
まはつてあるかつしやる
といふことだがあすこへいく
ほうさまはなりこそきた
ねへかありがたそふなぼうさま
たからさだめし弘法くわうほうさま
たらう北「そふよナアトはなし
なからゆくとこのぼうずかくちのうち
て「アアあらはれたといいなから
ゆくとや「アレみやきやすめ
にくわうほうさまだ
らうといふとちきに
のつてきてあらはれ
たとぬかしたせ北「
そふヨかのぼうすは
あとのしゆくでさんなて
さけをくらつてゐたから大い

なまくさだトふたりはいつはい
きけんでおほきなこゑてわるくちを
いへはかのぼうず「またあらはれた

のたしり
野田尻
や「ヲイ
はんしりその
さらやしきへさかなを
ちつとばかりもつて二かうはかり
かけてくだつしヲツトきめうきめう
まつ■かんをみようと手
しやくにて一ぱいぐつとひつ
かけちアチトきだはちには
ぬるいはへトいいながらまた
一ぱいひつかけヲイヲイばんじり
きのどくながらちよつくり
かんをなをしてくだせへト
またかんをなをさせて「ヲツト
てきたてきたおてうしの
おかはりめだトまたついで
のみそうにすると北「
コウコウやじさんいいかけんに
しなせへたつた二かうbかり
のさけをかんなをしだの
どくみだのといつてそんなひとりで
のんでしまつてそしておれにやア
のませねへきかトまつかになれはや「ハハ

かんとてめへといつしよにあつくなつたやつ

いぬめ

犬目　三丁

女「サアいもてんがく

のやきたてを

あがつておいで

なさいあがつておいでなさい

弥「ヲイかみさんいつほん

に文かこいつは

うまそふだと一とくち

がつきりと

くいかけ弥「（エエベタエエエベタエエエベタ）

エエこりやア

まるでいしだとんだ

ものをくらは

しやアがるこりやア

いもしやア

ねへはへ女「いもはいもだが

いしいもの■■うじ■た

ものを

（アハハハ）

とりさわ　二里
鳥沢

七一丁

や「コウコウなかなか
にめかし■もの
だせここらにや
みなれねへかなに
ものだらう北「ここら
にやアみなれねへ
といつたつて
おめへここらに
すまつてても
ゐやアしめへしでたらめを
いいなさんなや「それでも
いなかそだちと
いふなりじやア
ねへものを■ア
わかつた
江戸から
とまり
かけに
きて
ここらの
しんるい

へまわる
やつだ
ヲツト
あん
まり
うかれて
すんてに
なかをへ
あし
を
ふ
み
こむ
とこて
あつたけん
のんけんのん

さるはし
猿橋　三六丁
北「ヲイ
やし
さん
弥「なんだ北「このはしか

さるはしだとよめつほう下
まであるだらうのそして
はしのかけやうがめうだせや「
てめへこのはしのゆらいをしらねへ
な北「アアまたきいたことがねへや「
こりやむかしむかしももたらうがをに
がしまへゆくときにここがりゆう
ほちかげてわたることがてきねへで
どふしたものだらうとしあんを
するとおとものさるがいふには
わたしがいちばんはし
わたしをいたしやしせう
といつてそりやさるはみが
かるいものだからいき
なりむかふへとんていつて
つたかつらをたんともつて
きて大ほくのまつへしつ
かりとゆわいつけてまた
こつちへとひこして△
△ももたらうにこれをひかせると
をを■■■は大りきのことたから
いぬやとりにてつだわせてゑいや
うんとひくとまつがたをれ
てワリヤこつち

のほうへ▲
▲こけたもんだから
すぐにはしになつたらう
北「へへそふいふつがうにいけば
いいがや「ナニサうそじやアねへ
それだからこのまへのしゆくにいぬめ
とりさはといふところもあるハサ

こまはし
駒橋　　廿二丁
北「弥二さんさる
はしかきめう
だとおもつ
たらこの
はしも
またかけ
ようが
めうだぜ□
□はじ
めてくふうを
するひとが
さるとはこま
はしてあつ
たらう○
○弥「アアわるい
ぢぐちだヲヤ
ヲヤヲヤこのたに
のした（いき）な
たぼがせん
たくをして
けつかるぜこごか
大江やまの

おにがいわやの
いりくちしやア
ねへか北「なん
でもかまはねへ
ひとのいぬこそ
さいはひなれだ
あのたにそこへ
をりていつて
をつばんだんじ
かたをつけよう
じやアねへかや「
はかアいへここからみる
とちきだけれと
ま（つへたら）十万もあるべい
こゑんのねへのだサアゆかう

大月　十六丁
北「ハテハテとうかいたうとは
ちがつてをもしろくねへかい
だうだぞみんなやまばかり
てちよつと身たけしきは
いいがさくしややゑかきか
こまるだらう（北）「そふサ

しかしこんやははなさき
とまりとしてゆつくりと
のみかけようや「ここらに
そうおうなたほかあるか
しらん北「ナニさけを
のむにたほがいるもの
かや「それでもいま
えどでおはやるうたは
たぼさけさけ
れんげはなさか
しやれといふ
じやアねへか
アハハハ

花咲　十五丁
北「ヤイ
この
もう
ろくおやぢめひとのざしき
へあいさつもなくへゑつて
きやアがつてたばこぼん
にけつまづきやアがつて
はいだらけにしやア
がつたせうちしねへ
ぞせうちしねへぞおやぢ「ウウウそそう
でざしきをまちがいたの
だからかんべんさつしやイ
北「ナニかんべんさつしやいとは
なんのこつたりやうてをつい
てさんばいきうはいしねへ
しやアかんべんならねへ
おやぢ「ナニたいそうなことを
いはつしやるなわしだとつて
かつぬまのもくべいといつ
ちやアばつざにすわら
ねへひやくせうだぬし
のようなにんげんに
さんはいして

たまるもんかエト
りきむをきたはちも
一はいきけんゆへ
おやぢ
の△
△やかん
あたまを
はりたをす
とや二かみ
かねてとりなす
やうやうすませ
とて
しゆくのなの花
さきならで
えいかくら
としのかれき
のはなあき
ぢぢい

はつかり　一里
初狩
九丁
北「ヲイやじさん

ここだらうむかし
かがの千代のうと
いふあまがとほりかかつてはつかりや
ならべてきくはおしいことととうたを
よんだところは弥「コウコウコウきたはち
おうらいのひとがてめへのつらをみて
わらつていかアホンニむがくもんもうのつ
べらほうよ（つ）でにかかつたなまづ
やらうみみはあれどもきくらげめは
ふしあなどうぜんなおとこだ北「ヲイヲイ
あんまりひどいことをいいなさんな
なぜおれがもんもうだ弥「なぜと
いついてみろはつかりやの句くはがんの
ことでここのはつかりははじめてかり
をするといふたけがりきのこがりの
かりといふ字じだ北「ハハアしやくせんの
かりといふ字ともちがふの弥「そして
かがの千代と千代のうとはだいいち
じだいがちがふぜ北「へへでへぶむづかしい
ことをいふぜ千代と千代のうとは
のうだけのちげへだからそのくれへな
まちがいはありかちだヨ

しらの
白野　一里
たび人「ばアさんなんどきだね
ばば「ぬしはわけへみそらで
ときがしれねへものをナニ
わしにしれるもんかたび人「■
これはしくじつたそんなら
このわらじは二十四文と
ふだがついているから
せうちだがもちつ
と大きいのはねへ
かばば「ある
てつたつてない
てつたつてわしが
うちはたつたこれ
ぎりではこ小ばち
がひとつねへうちだ
あるかねへかうちを
みてものをいわつせへ
たび人「ヲヤまたしく
じつたそんならこれ
でもいいからかつて
いかふそれぜに
をやるヨばば「

ぜにをよこ
さねへでナニうる
もんかたび人「ホイ
またしくじつた
とき
に
じやうぶかね
ばばア「はいて
みたら
わかるべいサ
たび人「ホイ
又しく
しつ
た

くろのた
黒野田　一里
北「ヲイやじ
さんいまの
たび人はよつほと
きのなげへきのいいおとこだかあすこ
のばばアめもよつほどこんじやう
まがりだぜあれではなかなかこく

らくどころかちこくへいつておにの
ちやのみともたちにでもなつて
おにばばアといはれるのだ弥「そうヨ
サゾよめがまいにちないているだらう
いとしいこつた北「おめへもきつい
とりこしぐらうをするぜよめが
あるかねへかしれもしねへものを
弥「ナニよめがあるにちけへねへおれか
かんけへにアあのばばアめがよめ
いじりでうちがおさまらねへから
しんるいちうそうだんでアノみせを
あてがつてわらじでもうらせて
をくのだそれがちがつたらくびを
やるは北「ゐアかんしんだのウ
ほうらくならおれがてそうを
みてくだ
せへ

こまかい
駒飼　　十三丁
女「ぬかの
だんごか
こめのだんご
かとちたにも
あかつらふしきは
ごいせん
北「ハア
ツハアツ
これやア
きなこだと
をもつたらぬかた
いへこのかみさんは
とんだものをうるぜ▲
▲ばかばか
しいひとを
つけにした
ホンに
ぬかぬかと
一ほんくらつた
弥「コウ
かみ
さん

ぜには
ここへ
おいて
ゆく
せ
ホンニ
ゆだんと
すきも
なら
ねへ

つるせ　一里
鶴瀬

三丁

弥「ヲヲきだ八や
おせきしよ
めへたから
しりをおろさねへかそして
てめへはなんぞといふとさしでて
くちのききようもしらねへ
くせにさようたてまつるの
かようつかまつるのと
つまらねへことをいふが

けしてせきしよなんぞで
よけいなくちをきくと
かへつてあやしいやつだと
うたがはれるぜ北「それ
たつてもていねいにいふ
のにふしぎはねへ弥「
なんほていねいがいいとつて
とんでもねへとこへたてまつる
をつけたりうぬかことを
おてまへなんどといふから
ぢきにおさとがでるのだ
ヲツトおせきしよだ
しづかに
しづかに

かつぬま　一里
勝沼
三丁
女「サアサア
めいぶつ
のぶどう
をおみやげにおもちなさい
おもちなさい北「ナニもつていけ
ならせにやアいるめへ
女「ヲヤじやうだん
ばつかりそんなことを
おつしやらずと
おかゐなさつてくだ
さいまし弥「（をぶ
そやにはかをこし
めくねに）がきいて
あきれるヲイヲイ
ここへ二十四文ばかり
うつてくだつし
みちみちむしやむしや
くつていくべひ北「くふ
のじやアねへすふのだ
弥「つゆはすうのよみは
くうのよ北「ばかアいい

ねへみといつたつてくう
ほどあるものか弥「ハテサ○
○ぶどう
いふな
なんでも
いいか■
北「エエ
ぶどう
ばかにした
しやれ
だぜ

くりはら
栗原　■二丁
まこ「モシモシ
だんなそんなに
うまのうへて
ゐねむりを
さしつちやア
いけましねへ
弥「アアアアアアト
めをさまし
ヲイまごとん

おらアねなからたびを
しようとおもふからうまに
のつたのだめをあいてあるく
ならうまにやアのらねへト
またゴウゴウゴウやらかすとまこ「そ
がうじやうなこうあくせうめだ
こつけい
滑稽三太郎ばなしと申
いたつておかしみのぞうくわん
初はん二へんともしやつはんいたし
候間ごひやうはんよろしく
かん
もとめのほど
■■■■■
魯文作
国周画

いさわ
石和　三里
北「サアモウここから甲府こうふ
まではわけへねへせこんやは
おとまりはやなぎまち
あたりへふつくませようトはなしながら
ちんせんをはらひふねへのるとのりあひに
きんしよのものとみへて一七八のこきれいな
むすめがいるゆへきだ八いきなりひとをかき
わけそのむすめのほうへすりよりモシ
ねへさんこれからかうふまでは
いくらござりやすむすめ「ハイ
三里■丁ございます北「ハア
三りかねきみをおもへはさんりも
いちりさんりとねへときゐて
まはるありさまはトすこし
うかれてしやべるひやうしに
ふねがむかふのきしへ
あたれはトントしりもち
北「アイタタタヲヤいまの
ねへさんはホイもう
あがつたかざん
ねんや
ナア

かうふ
甲府　三里
かいのくにの
里俗りそく江戸
にて■といふ
ことを
おこれといふ
またひとの
女ほうを
お仲居なかゐと
いふまたむすめ
をおしやう
ものといふ
子どもを
ボコといふ
この余に
みみなれぬ
ことばあまた
なれどくだ
くだしけれ
ばここに
しるさず

弥「サアサア（と）んやらやつと甲府こうふへついたぞ
そこのきどをこすともふ一条いちでうまちだ
いそけいそけ北「あしたは
やなぎまち
の○
○はたこやへとうりうして
そこらここらのめひしよ
きうせきをみてあるかう
江戸へかへると随筆すゐしつ
をかくつもりだからアモウ
ここが一条いちでうまちだア
アアくたびれたぞくたびれたぞ

其二

あいやど「モシ
お江戸の
おきやく
さんふしぎなこゑんてかやう
にごあいやどをいたし
ますがとうちに■しはゐ
がはじまつておるときいて
ますてがナントお江戸の
しばゐはゑらいもんだ
そふでこさります
や「さようサそりやア
どふもさんがのついこ
ばんサそしておめへさんは
しばゐがおすきかへ
たび人「ハイわたくしはかじか
さわでござりますが
かうふにしばい
があるとさへきき
ますれはとまりがけで
でてまいります北「
ハアわつちらも江戸
じやアしばゐまちの
きんじよにをりやす

からしばゐはまいにち
めしのざいどうぜんで
たかづけもおんなし
こつてごぜへやすたひ「
へへそんならこわいろ
はなんでもおてきで
こざいませうねや「さ
ようサたてものたけの
ところはそのとうにんを
まへへすへておいてつかひ
やすから十にんなみ
にはてきやすのサたび「
さようならとうか
りかんとやらをいち
はい
ねか
ひ
ます
や「
ホイ
おやすい
ことで
ござり
やすヲイ

きたはち
うしろの
■りに
ちよつと
つけを
うつて
くだつ
しト
あふぎ
を
かほに
あてて
なにか
わから
ぬこわ
いろ
を
つかふと
かの
たび人
「イヤ
むしや
くしや
じアア

西条村
このむらに
甲斐源氏の祖
よしきよあそん
のやしろありかの■一とせ
かひにたびねせしをりこの
みやしろにもうてて
むすぶ手にえりも
しよそしよそ（信玄■）

魯文記
是より左　身延山道
大吉利市

ふせ

布施　三里

当むらのはたごや

みなとや大■エ門は

ふうりうのこころ

ざしにかものに■く往来をうらいのたび

人文人ぶんじん墨客ぼくかくちしきかたち

よるときは扇面せんめん唐紙とうしなど

いだしてふでをそめさせちんてうす

あるとし壽海■やかい老人らうじん甲府

かうふにて大あたりをとりみのぶ山へ

さんけいのみちすがらこのみせにたち

よりて

○なるばるとたつねて

きたる甲斐かいあれや

ふじの山みてひとのやま見る

又十返舎元祖かんそ一九翁おきな大

こくのぐはさんに

○このつちはたから打うちだす

つちでなしなまける

もののあたまうつつち

おのれ寄甲斐懸かひにはつこいといふ

だいをえて

○なまよみのかひなきものとうとみ

てやまくらことばもきみはならはじ

しもやま
下山　　二里
北「ヲヤヲヤヲヤ
こいつはきめの
わるいゆたはへ
もものはやせうぶならずい
ぶんにほひもいいがこりやア
きのはばかりたく
さんだそして
みねへ
ゆが
まつ
くろで
からだぢうへ
あかがつかア
弥「そのはづた
いつしかへたゆだか
しれもしねへ
できだはち
かふもあらふ
か

○てつびんの
ようなからだへ
ぬらぬらとゆあかの
たまるたびのせんとう

みのぶさん
身延山
一里八丁
弥「ヲイねへ
さんおめへは
どこでかみた
ようだの
女「ホンニ
わたくし
もさい
ぜん
から
あな
たを
おみ
うけ
もふしたようだと
をもつてをりました
北「やじさんつまらねへ
ことをいふせ女さへ
見るともうこしをぬかす
ぜサアサアおやまへさんけい
としよう
かたはらにて「■たか■

■たか■■たか■

其二

北「サアサアこれ
から七めんざんへ
のぼるのだから
やじさんよつ
ぼどいそかなくつちや
げざんができねへや「ナニ
まだひるじぶんたこれ
からのぼるにやアチト
じかげでもよみ
なからのほら
ねへけりやアほん
とうのしんじや
めかさねへ北「
それだつて
いまつから
きやうをおぼ
へるりくつ
にやアいかねへ○
○から
やつ
ぱり
だぶだぶ
とやらかそう

弥「なんだかたい
こもじゆすも
ねへからまつわ
るい北「そんなら
おれかあとから
たいこのこわ
いろをつかふから
おめへおきやうを
よむとしなせへ
弥「なむめう
ほうれんげエ
きやうなむめうほうれんげエきやう
北「ドンドンドン
トトトントトトントトトン
ドンツクドンツク

其三
おやぢ
「な
んだ
と他宗
じりのしゅ
ずはでき
ねへなら
できねへで
いいわへねんぶつ
むけんたの
ぢごくだのとぬか
しやアがつてひとを
ばかにするやらふだ
をれがあきんとの
ほうかエエじゆす「ナンダ
このおひほれめ
みのぶの
おやまへ
きてたしう
のじゆずを
あつらへる
やらもう
ろくといつたが

どうしたのだ
わるくふざけると
やかんあたまを
つふしにするぞ
おやし「コレつふしに
してもただのやかん
しやアねへはかね
のはいつている
やかんだからちつと
ねうちがある
はへこのかた
ふつけめ
しゆず「
イヤこの
ねんぶつ
むけん
のこく
とうおや
ぢめ
ばば「むにやむにや
むにやむにやむにやと
くちのうち
でこご
と

を
いふ
ゆへ
けん
ぶつ
には
いつ
かう
わから
ず

住家
や「ヲヤみなさんよく
おいでなさつたわたし
もさくはんしゆひよく
みのふへさんけいいたし
てかへりやしたが
なんにもおみやげが
ねへからちよつくり
ひとくちあけよう
とおもつてよひに
あげやしたのサ
ヲヤおひよこさんも
おつんさんもサアサア
おあがんなせへ北「
サアこれからいち
なんそひいて
もらつておどるへい
や「サアおかんもよい
からモシさじべいさん
一ツあげますにすけ
ろくといたしやす
さし「ヲヤこれはあり
がたやまぶきいろの
上かん上かんいただき

■らしやトつまらぬ
しやれをいつて
ぐいぐいと
やらかす
とながが
やの女
ほうむ
すめたちは
さみせんの
てうしをあはせる
おとトテチシチシ
「サアみな
さんもつと
こつちへ
およんな
せへおくは
せんでう
じき
せんでうじき
ヲツト
おつん
さん
そん
なに

うへへ
あげ
おさか
づき
は
にげ
や
せんヨ
「きた
八さんは
あさ
くさの
くめ
ほうへ
あそ
ひに
おいで
だと
いふこと
だから
さだ
めし
はうたへ
めいじん

だらう
ねへ
一ツおやん
なさいヨ